

8月3日 年間第18主日

出 16:1～15 エフェ 4:17～24 ヨハ 6:24～35

1. ヨハ

vv.26-27 「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」

主イエスが五千人の群衆に食物を分け与える奇跡を行われたので、翌日彼等はイエスを捜し求めてガリラヤ湖の向こう側にまでやって来ました。いつの時代にも人間にとって、生きるための食料を確保するための方策を探ることは、重要課題であります。しかし私たちの主イエス・キリストは、朽ちる食べ物ではなくて永遠の命に至る食べ物を与えるために、その「しるし」としてこの奇跡を行われたのでした。

神に受け入れられ救われて永遠の命を得るために必要なものは、何か(v.28)良い業を積むことではなくて、神の子イエス・キリストを信じることであり(v.29)、永遠の命に至る食べ物は人間が努力を積み上げて獲得するものではなくて、復活された祭壇のキリストが共にミサをささげる会衆に与えてくださるものであると、ヨハネ福音書は語っているのです。

2. 出

いつの時代にも、人間にとって日々の食料の確保は切実な関心事でありました。どんなに信仰心の厚い人であっても、この現実の関心事を超越するなどということはありません。……ということ、聖書は十分に承知して語っています。

イスラエルの人々の共同体全体は、不平を述べ立てました。

v.3 「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。」

イスラエルの神ヤーウェは、天からのパンすなわちうずら(v.13)とマナ(16:30)を民に与えられました。

参考のために民数記 11 章の同じ出来事の記事に言及すると、そこでは先ずマナが与えられ、それから間もなく民は次のような泣き言を言います。「だれか肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やんにくが忘れられない。今では、わたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、何も無い。」(民 11:4-6) そして神は憤りのうちにうずらをも与えられるのです。申命記は更にこれらの伝承に司牧的立場からの説明を加えて、この奇跡の伝承の本来の意図を明確にしました。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」(申 8:3) このような旧約聖書的背景を知ると、私たちは今朝のヨハネ福音書のテキストをよりよく理解することが出来ます。

3. エフェ

使徒パウロはキリスト者の人生を、「古い人を脱ぎ捨て」「新しい人を身に着け」て生きることであると説明しています。これは一人の罪人が洗礼の秘跡によって救われてキリスト者となっても、それは別人になることではなくて、神から与えられる新しい賜物と新しい(神の国の)希望によって生きようになることを言っているものと思われます。

Iコリ3章では「霊の人」と「肉の人」という用語を用いて語っていますが、この場合にも、キリスト者はどんなに「霊の人」に成長しても、全く「肉の人」ではなくなってしまうというのではなくて、むしろ多くの信者が相変わらず「肉の人」であるという残念な現実にもかかわらず、神の賜物に何一つ欠けるところがない(Iコリ1:7)という恵みを確信して語っています。

同様にIIコリ5章では、「(地上の住みかである)この幕屋に住むわたしたちは重荷を負ってうめいておりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです」(v.4)と述べています。

もちろん、洗礼を受けて救われたキリスト者は、「生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。これを飲んで成長し、救われるようになるためです」(Iペト2:2)と呼びかけられています。救いの完成を目指して成長していくためには、信仰が必要なのです。しかし、「永遠の命に至る食べ物」は、人間の善き業や努力によって生産したり獲得出来るものではなくて、復活された祭壇のキリストが共にミサをささげる会衆に与えてくださるものなのです。

4.

ローマカトリック教会は伝統的にミサ典礼を大切にしてきました。第二バチカン公会議の意向に基づいて刷新されたミサ典礼書は、「教会の絶え間ない確固たる伝承をあかしするものである」と宣言されました(総則前文1)。ミサ典礼書ばかりではなく、ローマカトリック教会の各種の儀式書も、私たち信者会衆が永遠の命に至る食べ物を受けて終わりの日に神の国に復活するという希望に、満ち満ちています。

地方教会の現場におけるミサの、しばしば無知と無理解によって軌道を外れた的外れな有様に対して、天上のイエスは心を痛めておられるに違いありません。これらの典礼書や儀式書を学んで、現場のミサをより正常なものに近づける責任は、司祭だけに押しつける問題ではなくて、私たち信者会衆が自ら共に担うべきものなのです。私たちのミサがより良いミサになることを願って……。

「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」(ヨハ6:35) アーメン、ハレルヤ。

8月10日 年間第19主日

王上 19:4~8 エフェ 4:30~5:2 ヨハ 6:41~51

1. ヨハ

v.51 「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きかすためのわたしの肉のことである。」

「ミサは、ある意味で二つの部分から成り立っている。ことばの典礼と感謝の典礼とである。」(ミサ典礼書の総則8)

この“感謝の典礼”は、キリストが御自身の死と復活の記念として、また将来の神の国における小羊の婚宴(黙 19:9)の先取りとして制定された、新しい契約の食事であります。教会はキリストが再び来られる時まで、この秘跡的な食事において、御自身をいけにえとしてささげて、今や永遠の神の右の座に着いておられる(ヘブ 10:12)復活の主にお会いするのです。

私たちキリスト者にとって救い主イエスとは、過去の思い出の中のナザレのイエスではなくて、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25) 天上のイエス・キリストであることを明確にしましょう。私たちはいろいろな種類の“史的イエス”を多くの仮説の上に構築することができます。しかしそれらによって、私たちが「天から降って来た生きたパンである」救い主イエスに出会うことが出来る訳ではありません。

v.44 「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

あなたが共にミサをささげる群れに属しており、洗礼の秘跡によってミサに参加する正当な権利を与えられているなら、それは天の父が引き寄せてくださったからであることを信じて、感謝しましょう。

「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」(エフェ 2:8)

2. 王上

ソロモン王の死後に北と南の二つの王国に分裂したイスラエルの歴史は、旧約聖書の列王記と歴代誌からその概略を知ることが出来ます。北王国の首都をサマリアに移したオムリ王朝(BC.884-842)は、古代オリエント世界において以後永く北王国が“オムリの家”と呼ばれることになった重要な王朝であります。そのバアル礼拝の積極的受け入れによる異教化への不快感を、聖書は強く表明して物語っています。この王朝二代目の王であるアハブの時代に、このバアル礼拝に対する戦いの舞台に登場したのが、ヤーウエの預言者エリヤでありました。

このエリヤが、バアルの預言者およびアハブ王家との戦いに疲れ果て、一本のえにしだの木の下に来て

座り、自分の命が絶えるのを主に願ったとき、彼を再び力づけて神の山ホレブにまで旅させたのは、天からのパンでありました。

w.7-8「主の使いは……、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。」

私たちキリスト者は、それぞれ人生の旅路においてときに行き詰まり、ときに挫折して、自分の信仰もキリストの救いも分からなくなってしまうような歩みをしています。事実、そのような不確かさが21世紀のキリスト教のありのままの姿であると言ってよいでしょう。しかし祭壇のキリストは、確かにミサをささげるすべての信者に、今朝も語っておられます。

「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」
(ヨハ6:51)

3. エフェ

v.30「神の聖霊を悲しませてはいけません。」

ミサにおける奉献文の中には、ニヶ所のエピクレーシスが含まれています。エピクレーシスとは、司祭があるもの(あるいは人)の上に手を伸べて、聖霊の力によって聖としてくださいと祈ることです。第二奉献文を例にあげて説明すると、その第一は感謝の賛歌を歌った直ぐ後に出て来ます。

「まことにとうとくすべての聖性の源である父よ、いま聖霊によってこの供えものをとうといものにしてください。わたしたちのために主イエス・キリストの御からだと御血になりますように。」

第二は記念唱を歌った後に続く部分です。

「キリストの御からだと御血にともにあずかるわたしたちが、聖霊によって一つに結ばれますように。」

共にミサをささげ、共に御聖体を拝領する会衆一同の上に、聖霊は働いてくださいます。w.31-32を、単なる世間の道徳の目標を示したものと考えたら、それは的外れな解釈です。

v.30「あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。」

これが会衆一同の一致の動機であり、根拠なのです。ですから私たちのミサは、IIコリ13:13を引用した司祭の挨拶でいつも始まるのだということを、重く受け止めましょう。

アーメン、ハレルヤ。

8月17日 年間第20主日

箴 9:1～6 エフェ 5:15～20 ヨハ 6:51～58

1. ヨハ

w.53-55 「イエスは言われた。“はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。”」

キリスト教会はその誕生のときから、聖体祭儀であるミサを大切にきて来ました。1969年に公布されたカトリック教会の「ローマ・ミサ典礼書」は、その総則の前文の中で次のように述べています。

「教会は、キリストの血によって獲得され、主によって集められ、みことばによって養われている神の民であり、全人類家族の祈りを神に向ける使命を受けた民、救いの神秘のために、キリストにおいて感謝しながらそのいけにえをささげる民、キリストのからだを血を受けることによって一つに結ばれる民である。この神の民は、その起源において聖であるが、感謝の祭儀に意識的、行動的、効果的に参加することによって、聖性の中に成長し続ける。」(5)

「永遠の命」という言葉は「わたしはその人を終わりの日に復活させる」という主イエスの言葉と結びつけて理解されなければなりません。この「永遠(アイオーン)」とは、来たるべき新しい世(マタ 19:28)のことであって、今の罪の世がそのままいつまでも継続するという意味では全くないのです(II ペト 3:11-13)。

ですから現代のキリスト者にとっても、聖体の祭儀であるミサは掛けがえもなく大切なものであって、単なる宗教儀式以上のものです。

2. エフェ

w.18-19 「むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。」

ミサ典礼書の総則はその第二章の中で、「歌は、心の喜びのしるしである」(19)と述べました。共にミサをささげる会衆の心の喜びは、神の国を受け継ぐ喜びであり、この希望を与えてくださった父なる神への感謝によるものです。

ミサの中で会衆が唱える主の祈りに、司祭は副文を添えて、「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます」と祈ります。

3. 箴

「キリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです」と、使徒パウロは言いました(I コリ 1:30)。

主イエスが最後の晩餐で、御自分のからだと血による感謝のいけにえを制定されたという、教会にとってミサが持っている重要な意味を、私たちは今朝の箴言のテキストを背景にすると、とても理解しやすくなります。

私たちにとって神の知恵となられた(1コリ1:30)キリストは、今朝の私たちのミサで語りかけてくださっています。

vv.5-6 「わたしのパンを食べ、わたしが調合した酒を飲むがよい。浅はかさを捨て、命を得るために、分別の道を進むために。」

そのようにして、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」というヨハネ福音書の主イエスの言葉の重みが、すべてのキリスト者たちの上に輝いているのです。 アーメン、ハレルヤ。

8月24日 年間第21主日

ヨシュ 24:1～18 エフェ 5:21～32 ヨハ 6:60～69

1. ヨハ

ここでは広い意味での「弟子たち」が登場します。後の使徒たちもイエスの弟子でした。初代教会の構成員である信者たちも、もちろんイエスの弟子であると理解されていました。さらにそれを取り巻く多くの同調者ないし洗礼志願者たちも、広い意味での弟子たちと考えられていたことでしょう。

そのような弟子たちが、キリストの福音の核心部分について、しっかりと信じるのが出来ずにつぶやいたりつまずいたりしているという有様は、何も近代や現代に初めて現れた現象ではなくて、恐らく最初からあった地上の教会のありのままの姿であることを、今朝の福音書のテキストは明らかにしてくれています。

v.60 「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていられようか。」

現代のキリスト者の多くが、“あなたはなぜ御聖体を拝領するのですか？”、“あなたはからだの復活と永遠の命を信じているのですか？”と質問されたら、どう答えてよいのか分からなくて困ってしまうのではないのでしょうか。

私たちのミサは、通常次のような閉祭のあいさつで終わります。

司祭：感謝の祭儀を終わります。行きましょう、主の平和のうちに。

会衆：神に感謝。

ところが「子どもとともにささげるミサ」(2003年使用開始)では、この他にもう一つの司祭のあいさつが選択出来るようになっています。

司祭：感謝の祭儀を終わります。主キリストの平和と福音を告げ知らせるために、喜びのうちに行きましょう。

会衆：神に感謝。

私たちの中で少しでも真面目に信仰のことを考えている人たちは、きっとこのあいさつの言葉に一種の後めたさを覚えるに違いありません。大人の信者である自分たちでさえ、「主キリストの平和と福音を告げ知らせる」とはどういうことなのか分からないのに……、そしてそれを子供たちにどう教えたら良いのか殆ど知らないのに……と。

vv.66-67 「このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。そこで、イエスは十二人に、“あなたがたも離れて行きたいか”と言われた。」

実際に世界中でこの半世紀ほどの間に、これまでキリスト教的な生活をしていた多くの人々が教会を去って行きました。そして、今なおミサに参加している人たち自身も、心の中では迷っており、どちらかと言えば積極的にではなくて消極的に教会に連なっているというのが、偽らざるところではないのでしょうか。

しかしこのような現象は、現代世界で頂点に達したと言うことは出来ても、元来地上の教会がその当初から抱いていた問題であり、決して新型のウィルスのような、キリスト教を根底から破壊してしまうようなも

のではないことを知らなければなりません。むしろそのような現実の上に、当初から教会は建てられ、歩んで来たのでした。

2. ヨハ

v.68-69 は、(多少修正された形で)私たちのミサの“拝領前の信仰告白”として用いられているものです。それに先立って、会衆が主の祈りを唱えた後に、司祭は“教会に平和を願う祈り”の中で次のように述べます。「わたしたちの罪ではなく教会の信仰を顧み(てください) ……」。」

信仰というものを考えるとき、現代人は“自分の”(真剣な、熱心な…)信仰のことを先ず考えようとします。しかし信仰とは父なる神が人に与えてくださるものであって、それはキリストの民である共同体を形成するものです。だからそれは“教会の信仰”なのです。

v.65 「そして、言われた。“こういうわけで、わちしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。’’」

私たち一人一人は無力で罪深い者に過ぎませんが、教会の信仰、教会を形成させている(父なる神から与えられた)信仰に、自らもアーメンと唱えて参加しているのです。洗礼の秘跡を受けるとは、そういうことです。だから「わたしたちの罪ではなく教会の信仰を顧み(てください) ……」なのです。

ヨシュア記の今朝のテキストを、近代の多くのキリスト者は個人の主体的な信仰を鼓舞する物語りとして読んで来ました。それは全く間違っている訳ではありませんが、ただそのような解釈が、教会とは同じ信仰を持った人々が結集して作り出した同志的結社であるかのような誤解の原因になったことも否定出来ません。

信仰とは、その本質において、神が人に与えて神の民の共同体を形成させるものであり、従って“イスラエルの信仰”、“教会の信仰”等という枠組みの中で理解出来るものなのです。

3. エフェ

v.25 「キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、」

v.32 「この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです。」

この神秘の偉大さを、私たちはキリスト者として生きる人生を通して、徐々に深く理解して行きます。キリストのいけにえの“重み(重大さ)”を理解すると、教会の“重み(重大さ)”が分かるようになります。なぜならそれは「神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」(使 20:28) だからです。

「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう。」
(拝領前の信仰告白) アーメン、ハレルヤ。

8月31日 年間第22主日

申 4:1～8 ヤコ 1:17～27 マコ 7:1～23

1. マコ

v.8 「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」

初期の頃のキリスト教会にとって、その誕生の母体であるユダヤ教の「言い伝え」に対する明確な態度表明は、緊急な課題であったと思われます。ユダヤ教においては律法学者による聖書の解釈である「昔の人の言い伝え」が大きな影響力を持っていて、それは聖書と並んで、または聖書を越えさえして、人々の宗教生活を規定していました。

このユダヤ教の「言い伝え」を拒否したのは、初代教会から始まったのではなく、イエス自身に起源していたと思われます。それは人間の業であって、正当な解釈であるよりはむしろ聖書そのものを捨てることだと、主イエスは断定し、初代教会もそのように考えたものと思われます。

2. 申

ユダヤ教にとってもキリスト教にとっても、聖書は“正典(Canon)”としての特別な地位をもって受け入れられています。この“正典”という語は「諸文献」「古典」等に相対して用いられ、共同体の宗教と信仰生活の規範ないし基準として、独占的な権威を持つ文書群という意味で理解されて来ました。このような“正典”としての権威の主張の典型的な例が、申命記のこの言葉なのです。

v.2 「あなたたちはわたしが命じる言葉に何一つ加えることも、減らすこともしてはならない。わたしが命じるとおりにあなたたちの神、主の戒めを守りなさい。」

プロテスタントのキリスト教が、聖書のみを唯一の権威と主張するのに対して、カトリック教会は「神の啓示に関する教義憲章」で、神の啓示の源泉は聖伝と聖書であると教えます。しかしこの二つは「同一の神的起源をもち」(9)、「聖伝と聖書は、いわば鏡のようなもので」(7)、その内容は「使徒たちから伝えられたこと」(8)であり、「聖伝によって、…… 聖書そのものがより深く理解され」(8)と説明されています。第二バチカン公会議は、すべてのキリスト信者が喜んで聖書に親しむことを、声高に勧めました。(25)

3. ヤコ

v.18 「御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。」

v.21 「心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。」

キリスト教の世界にも、聖書の学問があり、聖書の解釈が存在します。「昔の人の言い伝え」という言葉でユダヤ教の律法学者による聖書解釈を拒否した主イエスとその教会は、このようなキリスト教世界の新

しい学問的資産に対して、どのような姿勢で対応したらよいのでしょうか。

第二バチカン公会議が、すべてのキリスト信者が自ら聖書をひもとして学び、直接聖書そのものに親しむことを勧めたことは、本当に適切なことでありました。

世の中には数え切れない程たくさんの、キリスト教や聖書の解釈に関する出版物があります。20世紀のキリスト教会を振り返ると、多くの人々が自ら聖書を読み、自ら学ぶという基本的作業を省略して、手とり早くそれらの解説書を盲目的に受け入れることによって“物知り顔”をして来たというのが、実情であったように思えます。“聖書と並んで”以上に“聖書を越えて”、人々のキリスト教理解を実際にリードして来たのは、このような解説書であったとすることが出来ます。

しかし、聖書を学ぶということは、初代教会以来、「使徒たちから伝えられたこと」を聞き取り受け入れることであります。この基本は昔も今も少しも変わっていません。現代の私たちが受け入れるべき「御言葉」は、使徒たちから伝えられ、新約聖書の時代の信者たちが受け入れたのと同じ「御言葉」なのです。

聖書の学問も、聖書の解釈も、それが私たち信者に「使徒たちから伝えられたこと」をより明確に伝える役割を果たすときにだけ、有益であると言うことが出来ます。すべての学問が私たちに益となる訳ではありません。

このような信者への指導に関して、「神の啓示に関する教義憲章」は次のように述べています。

「しかし、この教導職は神のことばの上にあるものではなく、むしろ、これに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである。」(10)

単なる人間の業にしか過ぎない“聖書解釈の言い伝え”のようなものから逃れて、自ら喜んで聖書そのものに親しみ、「使徒たちから伝えられたこと」だけを学ぶキリスト者に、私たちはなろうではありませんか。 アーメン、ハレルヤ。